

青鳧七結せいふ ゆひ下州より甲州あいに送らる。其の御志ひ も悲母の第三年に相当たる御孝養なり。

問ふ、止観明し かんみょうじょう 静前代未聞の心如何。答ふ、円頓止観えんどん し かんなり。問ふ、円頓止観の意何。

答ふ、法華三昧の異名なり。問ふ、法華三昧の心如何。答ふ、夫末代の凡夫法華經を修行する意に二有り。一には就類種じゅるいしゆ かい えの開会、二には相對種そうたいしゆの開会なり。問ふ、此の名は何より出でたるや。答ふ、法華經の第三藥草喩品に云へる「種相体性」の四字なり。其の四字の中に第一の種しゆの一字に二あり。一には就類種、二には相對種なり。其の就類種とは釈に云はく「凡そ心有らん者は是正因しやういんの種なり。隨聞一句は是了因りやういんの種なり。低頭てい ず挙手こしゆは是緣因えんいんの種なり」等云云。其の相對種とは、煩惱と業と苦との三道、其の当体を押さへて法身ほっしんと般若はんにかと解脫げだつと稱する是なり。其の中に就類種の一法は、宗は法華經に有りと雖も少分は又爾前の經々にも通ず。妙樂云はく「別教には唯就類の種有って而も相對無し」云云。此の釈に別教と云ふは本の別教には非ず、爾前の円或は他師の円なり。又法華經の迹門の中、供養舍利じやり已下二十余行の法門も大体就類種だいたいの開会なり。

問ふ、其の相對種しやうしゆの心は如何。答ふ、止観に云はく「云何なるか円の法を聞く。生死しそくほっしん即法身ほっしんなり、煩惱ぼんのう即般若そくほんにかなり、結業けつごう即解脫そくげだつなりと聞くなり。三の名有りと雖も而も三の体無し。是一体なりと雖も而も三の名を立つ。是の三即ち一相にして其れ実には異なり有ること無し。法身ほっしん究竟くきやうすれば般若解脫まも亦究竟す。般若清淨なれば余も亦清淨なり。解脫自在なれば余も亦自在なり。一切の法を聞くも亦是くの如し。皆佛法を具して減少する所無し。是を聞円と名づく」等云云。此の釈は即ち相對種の手本なり。其の意如何。答ふ、生死とは我等が苦果の依身いかわる おんなり。所謂五陰・十二入・十八界なり。煩惱とは見思けん じ・塵沙じんじや・無明む みやうの三惑なり。結業とは五逆・十惡・四重等なり。法身とは法身如来、般若とは報身如来、解脫とは応身如来なり。我等衆生無始曠劫より已来此の三道を具足し、今法華經に値ひて三道即三徳となるなり。難じて云はく、火より水は出でず、石より草は生ぜず。惡因は惡果を感じ、善因は善報を生ずるは仏教の定まれる習ひなり。而るに我等其の根本きわを尋ね究むれば、父母の精血赤白二滯和合して一身と為る。惡の根本不淨の源なり。設たひ大海を傾けて之を洗ふとも清淨なるべからず。又此の苦果の依身は其の根本を探り見れば貪とん・瞋じん・癡ちの三毒より出でたるなり。此の煩惱・苦果の二道に依って業を構ふ。此の業道即ち是結縛けつばくの法なり。譬へば籠かごに入れる鳥の如し。如何ぞ此

の三道を以て三仏因と称するや。譬へば糞を集めて<sup>せんだん</sup>梅檀を造れども終に香ばしからざるが如し。答ふ、汝が難大いに道理なり。我此の事を弁へず。但し付法蔵の第十三・天台大師の高祖・竜樹菩薩、妙法の妙の一字を積して「譬へば大薬師の能く毒を以て薬と為すが如し」等云云。毒と云ふは何物ぞ、我等が煩惱・業・苦の三道なり。薬とは何物ぞ、法身・般若・解脱なり。「能以毒為薬」とは何物ぞ、三道を変じて三徳と為すのみ。天台云はく「妙は不可思議に名づく」等云云。又云はく「夫一心乃至不可思議<sup>それ</sup>境<sup>ふかしぎきょう</sup>の意<sup>ここ</sup>此に在り」等云云。即身成仏と申すは此是なり。近代の華嚴・真言等、此の義を盗み取って我が物と為す。大偷盗<sup>ちゅうとう</sup>、天下の盗人はなり。

問うて云はく、凡夫の位も此の秘法の心を知るべきや。答ふ、私の答へは詮無し。竜樹菩薩の大論<sup>九十</sup>に云はく「今漏尽の阿羅漢還って作仏すと言ふは、唯仏のみ能く知ろしめす。論議とは正しく其の事を論ずべきも測り知ること能はず。是の故に戯論すべからず。若し仏を求得する時乃し能く了知す。余人は信ずべし、而も未だ知るべからず」等云云。此の積は爾前の別教十一品の断無明、円教の四十一品の断無明の大菩薩普賢・文殊等も未だ法華經の意を知らず、何に況んや蔵・通二教の三乗をや、何に況んや末代の凡夫をやと云ふ論文なり。之を以て案ずるに、法華經の「唯仏与仏乃能究尽」とは、爾前の灰身滅智<sup>けしんめつち</sup>の二乗の煩惱・業・苦の三道を押さへて、法身・般若・解脱と説くに二乗還って作仏す。菩薩・凡夫も亦是くの如しと積するなり。故に天台の云はく「二乗の根敗<sup>こんばい</sup>之を名づけて毒と為す。今經に記を得るは即ち是毒<sup>これ</sup>を変じて薬と為す。論に云はく、余經は秘密に非ず法華は是秘密なり」等云云。妙楽云はく「論に云はくとは大論なり」云云。

問ふ、是くの如く之を聞いて何の益有らんや。答へて云はく、始めて法華經を聞くなり。妙楽云はく「若し三道即ち是三徳と信ぜば尚能く二死の河<sup>わた</sup>を度る。況んや三界をや」云云。末代の凡夫此の法門を聞かば、唯我一人のみ成仏するに非ず、父母も又即身成仏せん。此第一の孝養なり。病の身たるの故に委細ならず。又々申すべし。

建治四年<sup>太歲戊寅</sup>二月廿八日

日 蓮花 押

富 木 殿